コロナ騒動と出戻り女

益池　成和

世界は初期の段階で選択を間違ってしまった。断言してもいい。いわずと知れた新型コロナウイルスの話である。ＷＨＯがパンデミックと認定しまったことがそもそもの間違いだった。

コロナ騒動ということで始めてみたのだが、騒動どころか、狂詩曲というフレーズを使いたいくらいである。（騒動と狂詩曲の違いはちと分かりかねるが）

むろん個人的にも恨みがある。私の母は令和二年三月に亡くなったのだが、このコロナのために最後の一週間、療養型病院から面会を禁じられた。前年のクリスマス頃に担当の女性医師から呼び出しを受け、死因を早くも告げられた。それまでも病院まで車で二十分程度ということもあって、三日に一度は顔を見せに行ってはいたが、それからは毎日見舞うようになっていた。それが出来なくなったのである。担当医には食い下がったが、何かあれば連絡すると押し切られた。確かに連絡はもらえたが、その時は息をしていないというものだった。

私は当初からこの新型コロナに対しては世間の対応は馬鹿げていると言い続けてきた。確かに未知のウイルスということで不安になるのは致し方ないにしろ、その報道の仕方が異常だと感じていた。誰が思いついたのかは知らないが、ウイルスの感染者数を日ごと報道し、しかも県単位でカウントする。しかも連日連夜、ＮＨＫから民放までニュース番組はおろか、ワイドショウまで同じ事を連呼する。

人間は知能を持つだけに不安には弱い動物である。連日連夜の偏向報道により、まず政治家が過剰反応をおこした。というより、対応せざるをえなくなった。中央の政治家もそうだが、県単位の感染者数を見せられ、県知事の対応が大きく取り上げられるようになった。

そこからはさながら各県首長のパフォーマンス大会である。競うように感染押さえ込みを唱え、他府県には行くな、自宅待機が肝要などと青筋立ててテレビカメラの前で言いまくる。いかにも私は仕事をしていますと言うことなのだろうが、動くな、じっとしていろとは一体人間をなんだと思っているのだろうか。そして病院が逼迫しているとマスコミが騒ぎ立てると、競うように病室確保をはやし立て、仕事量が増えたからといって医療従事者をたたえまくる。当たり前だろう、たかが風邪ごときの患者にいちいち防護服を取り替えての接触を強いられれば、まともな仕事ができるはずもない。

病院逼迫の次は飲食店である。居酒屋やカラオケ店がどういう論理か感染の主犯などと名指しされ、行くないくなの大合唱である。そしてそのあげくが、飲食店が気の毒だということになり、飲食店に限らないが補償金の大盤振る舞いである。居酒屋が気の毒だ、お店が閉店を強いられ大変だなどと連日ワイドショウなどで、まるで阿呆のひとつ覚えのように唱えられているが、これは事の一面を取り上げているに過ぎない。緊急事態宣言下では、一日六万円もの営業補償が払われるのだから、お店によってはコロナバブルで大もうけというところも決して少なくない。

怖い怖いはずの肝腎の新型コロナなのだが、これを書いている今日の時点で（２０２２年１月１７日）、日本においては、感染者数１８５万５９８６人、死者数１万８４４６人。

いっておくが日本の人口は一億二千万六百人弱である。朝日の放映した番組によると、この感染による総人口に対しての致死率は０．２％だとか。これのどこがパンデミックなのだろうか？ しかも感染者のほとんどが、無症状という話ではないか。エボラ出血熱のように罹患すればほとんどの人が死んでしまうというなら分かるが。コロナさえ回避できれば総て事もなしとでもいいたいのか。

どの放送局も分かっててほとんど取り上げようとはしなかったが、コロナ騒ぎのおかげで、一昨年はほとんどの社会活動が停止を強いられた。あらゆるイベントが取りやめを決定し、オリンピックも一年先送り。そのあげく、疫病退散を祈願して行われるはずの有名な祭りさえ見送られた。

報道というものは公平性を保つために、反対意見も流すものだが、今回のコロナ騒動においては、なぜか見事に異論は抹殺である。感染の有識者や大学教授のなかにも、新型コロナはたいした病気ではないのではないか、と言う人も少なからずおられた。しかしその手の考えの持ち主は、全くテレビや新聞に取りあげられることもない。出演したとしてもその回限りで、ひたすらコロナには気を付けろ、家でじっとしていろ、という怪しげな専門家ばかりをうんざりするほど出しまくる。まるで壊れたレコード盤のようなコメントだらけだが、この人たちも随分と稼ぎまくったに違いない。

このエッセイを書いている時点で、一時収まりを見せていたコロナの感染者数が又オミクロン株の登場で爆発的に増えているという。テレビに映ることが嬉しくて、感染者が増えた各県知事が、またぞろやれ蔓延防止だ、緊急事態宣言だ、と騒ぎだした。この馬鹿騒ぎいつまで続くのだろうか。

昨年の春、丁度緊急事態宣言発出直前のことである。一人の女が十年ぶりぐらいに私の店にひょっこり現れた。「マスイケ！」と叫んで。いっておくが彼女は私より十五も年下で、知り合ったときまだ初々しいはずの現役女子高生だった。

店から歩いて二、三分のところにある今もなじみの喫茶店のアルバイトとして知り合った。私の彼女への第一印象は、がっくり、だった。新しい子が来る、それも女子高生ということで少なからず期待していたのだが、髪の毛を無造作にゴムで束ね、やぶにらみのような目つきで突っ立っているのである。一応は「いらっしゃいませ」と口にするが、ニコリともしない。通い出して間もない頃、マスターから店の暖房器具に火をつけろといわれ、家で付けたことがないので出来ないと彼女は断った。私は唖然となった。この子は馬鹿なのかと。

可愛くもない、愛想もよくなく、とにかくがさつだけが目立つ女子高校生だったが、何を気に入ったのか、いつの間にか私の店に寄りつくようになった。

その頃私はまだ三十そこそこで普通なら二十歳前の女の子が出入りするとなると嬉しいはずなのだが、口には出さなかったものの、この若い訪問者に対しては参ったなあ、という思いしかなかった。

彼女から出てくる話も、私にとっては唖然となるものばかりだった。過干渉な母親への数々の不満はまだしも、ラブホテルのスタンプを押された二つ折りの紙を見せられたときには、反応に困った。これから近くの駅で見知らない男と待ち合わせだといって差し出したものだった。「行ってくるわ。気に入らんかったら、そのままドロンしたんねん」と付け加えて。どこで知り合ったのか知らないが、博打場のお茶運びをしたという話にも驚いた。

大丈夫なのかと問う私に対しての答えが、突然の思い出し笑いと、「バイト料よかったで！」というものだった。

当初戸惑いと困惑ばかりの彼女だったが、ほぼ毎日のようにやってくると、不思議なもので、たまに店に現れないと、妙に気になるようになった。気になるといっても、女性相手というよりは、まるで捨て猫が迷い込んで住み着かれたような思いで、それが何年か続いた。

彼女は高校を卒業しても就職はせず、アルバイトばかりしていた。喫茶店通いもかなりの間続けていた。その間私は頼まれて、彼女に車の運転の仕方も教えた。又、妹とのヨーロッパ旅行の間店を任せたこともあった。

彼女が私の店に居着いてあれは何年目のことだったろうか、ピタリとやってこなくなったのである。男が出来たらしい話は聞かされていたが、私に何でも話す彼女にしては珍しく、相手の話はあまり口にしなかった。

いつまで経っても私にとっては彼女は女性というよりは子供で、しかもがさつでやぶにらみの失礼な女でしかなかった。それが不思議なもので、ピタリと顔を見なくなると気になって仕方なくなった。店への立ち寄りが途絶えて二週間あまり経った頃だったと思うが、私は早朝家を抜け出し彼女の自宅に向かった。そしてたまたま家の前の通りで犬の相手をしていた彼女の手を引っ張り、店に連れて行った。抵抗はなかった。店のパイプ椅子に座らせ私は何を発したのだろうか。覚えていない。ただ、その後私は自身のなかで自分のことを男じゃないと責めるようになり、人生三度目の落ち込みを経験した。高校生の時はベートーヴェンの「田園」が私を救ってくれたが、その時はモーツァルトとブルックナーの音楽だった。

彼女は結婚をしてからも、五、六年に一度は例によって「マスイケ！」と叫んでは店に現れ、私のたばこを何本か盗んでいった。二人の子供にも恵まれ、そして結婚九年後に夫を突然死で失ったことも、その折に彼女の口から聞かされたものだった。

昨年の四月、ほぼ十年ぶりに現れた彼女は、例によってこちらが座れという前に店のパイプ椅子にドカリと腰掛け、勝手に私のたばこを取りあげ吸い出した。そして、「暇や、金がない」と訴えだした。聞いてみると長年おしぼり屋のアルバイトをしているが、コロナのせいで仕事量が減り、収入が不足して大変だという。いいアルバイトを紹介しろ、と言いだした。

当時私は生来のものぐさに加え、前年末のナトリウム不足による入院生活がたたって体調不良が続き、店のなかが乱雑なままだった。「この店の片付けでもするか」と云ってみた。「それええやん。したるわ」と即答だった。金額も条件も聞かずに。

「平成を飛び越えてきた女やなあ」うちでの、送迎付きカラオケ付き、時として一家の食事会付き（孫までついてくる）の奇妙なアルバイトがはじまって何度目かの日に、彼女がかつてバイトしていた喫茶店につれて行った時のマスターの言である。彼女をみて昔と全く変わっていないと、大笑いだった。確かに彼のいうとおり、愛想なさも、がさつさも、突然の思い出し笑いも、そして口の悪さも高校生のままで何ら変りはなかった。

新型コロナの感染者数は、一週間ほど前からどの県でも最高数をたたき出しているという。ことにこれまでこの手の騒ぎには無縁だった各県首長が、満を持した体でやれ蔓延防止だ、緊急事態だと国に迫っているという。たかが０．２％の致死率しか持たない微弱な

感染症を、まるでペストかコレラのように騒ぎ立てて懲りない。困ったものである。まあ、この文章が印刷されているときには収まっているだろうが。

私にとって迷惑千万で実に馬鹿げたコロナ騒動だが、どのような物事でも、悪い一面ばかりではないものである。マスコミが作り上げた感染症新型コロナがなければ、今ではいささか薹のたったアルバイトを雇う羽目には至らなかったはず。その点はコロナに感謝しなければならないかも知れない。いや、どうだろうか。確かに店のなかは少しはきれいになったが、このバイトさんの相手をするのもいささか大変な面もあるので、ねえ？！